

<有明海異変> 諫早水門の開放は環境改善に不可欠

2002 年 2 月 21 日

有明海漁民・市民ネットワーク事務局 羽生洋三

有明海の環境悪化の原因を調査している農水省の第三者委員会は、諫早干拓との間に因果関係が成り立つとの仮説のもと、水門開放による調査の必要性を提言した。これに対し、1 月 25 日付けの本欄で江刺東北大学名誉教授は、委員会提言には同意できないとして、水門を開放せずに問題を解決するよう主張されている。問題の核心は、氏の主張の前提が委員会の想定した因果関係論とは異なることだ。

江刺氏はノリ酸処理剤に含まれる有機酸が有明海での貧酸素水塊発生の一因というが、どうだろうか。冬季のノリ養殖に用いられる酸処理剤が、何故に夏季にしか発生しない貧酸素の原因となるのか。有機酸は微生物の分解を受けやすいため、冬に投棄されたものが夏まで分解されずに残存するとは考えにくい。もしそうならば、冬から夏にかけて海水中の COD（化学的酸素要求量）が増加するはずだが、そのような傾向はない。また、我々が平成 11 年度の有明海における酸処理剤販売実績（二千九百トン）から試算した結果、酸処理剤の投棄は一日あたり海水中の COD を多くても一〜二%程度上昇させるだけであった。この程度の有機物量の増加と分解に伴う酸素の消費量では、底層の貧酸素化を説明できない。貧酸素水塊が観測されている海域は、今やノリ養殖が行われなくなった諫早湾が中心である事実とも符合しない。

次に、酸処理剤に含まれているリンや有機酸が植物プランクトンの異常増殖（赤潮）を促しているという氏の指摘だが、これも首肯しがたい。確かに酸処理剤に含まれるリンが植物プランクトンを増殖させる側面はある。しかし同時に、ノリの水揚げに伴う有明海からのリンや窒素の除去量も同様に評価する必要がある。我々の見積もりによると、酸処理剤の投棄に伴う有明海へのリンの負荷量は約一〇〇トン、窒素は五〇トン程度だ。それに対し、ノリの水揚げによって有明海から除去される量は、リンで九〇トン、窒素で九〇〇トン以上となり、リンは負荷の大半がノリの収穫として回収され、窒素に至っては収穫に伴う除去量の方がはるかに大きいのだ。

もちろん酸処理剤の投棄に伴う急激な pH の低下が、海水中の微生物や稚魚、二枚貝などの浮遊幼生に与える影響は無視できないだろう。しかしノリ養殖全体の負荷という観点で評価した場合には、酸処理が有明海の富栄養化や赤潮発生の原因だという氏の説は、以上のようにあまりにも短絡的と言わざるを得ない。

近年の貧酸素や赤潮多発の原因は、築堤による有明海全体の潮流変化や潮差減少、採砂や工事に伴う湾周辺の底生生物の激減や底質の細粒化、堤防閉め切りと干潟破壊による負荷の増大など、諫早と関連づけなければ、時期的にも場所的にも合理的な説明は不可能で

ある。この仮説に立てば、流動や負荷を回復させるには堤防の撤去や少なくとも水門の長期にわたる常時開放が必須となる。したがって開門調査は、委員会仮説の検証のためばかりでなく、これ以上の環境悪化にブレーキをかけるためにも、一日も早い実施が望まれるのである。